

論文概要書

喜劇の誕生

—マキアヴェッリの文芸諸作品と政治哲学—

村田 玲

20 世紀の最後の四半世紀以降、政治思想史家によるマキアヴェッリ研究は、おおむね 2 つの潮流に分類することができる。すなわち、マキアヴェッリの諸著作のうちに、古典古代と聖書宗教の伝統からの離脱の契機を見出そうとする潮流と、そこに文芸復興期に流行した共和主義思想の反映を見出そうとする潮流である。本研究は、とりわけ前者の研究動向への貢献を企図するものである。そして本研究の独創性は、マキアヴェッリの文芸諸作品、とくに 2 篇の喜劇作品の観点から、その政治哲学の革新性を剔抉しようとする方法に存する。ひとりの文章家としてのニッコロ・マキアヴェッリが生前に博したおそらく最高の名声は、「喜劇作者」としての名声であった。しかしながらマキアヴェッリ研究史上、2 篇の喜劇作品に関する研究は極めて寡少であるのみならず、それら研究もまた微細を穿つ伝記的関心に終始するか、あるいは劇中に確かに看取される諸々の政治的主著の残響を指摘するに留まってきたように思われる。これまでのところ、喜劇作品を『君主論』および『ディスコルシ』とすくなくとも同程度に重視した研究として、なんらかの顧慮すべき先例を挙げることは困難である。本研究は、マキアヴェッリ全集中、おそらく未開拓のまま残された最後の領域について考究を尽くすことが、2 つの政治的主著の革新性に関する最も精確な説明へと導くという確信に基づいている。何故、マキアヴェッリの政治哲学は、「偉大な伝統」、すなわち古典古代と聖書宗教の伝統の双方と決裂するに至ったのか。

## 第 I 章 マキアヴェッリ前史

本章の目的は、①以下の論述において頻繁に運用され、その基本構造を規定するところの「悲劇」、「神聖喜劇」、そして「人間喜劇」の術語の意味内容を確定し、②ニッコロ・マキアヴェッリの政治的主著の観点から喜劇作品を理解するのではなく、喜劇作品の観点から政治的主著を理解する手続きを正当化することにある。

### 第 i 節 笑いと喜劇に対する倫理学、および政治学の古典的態度の瞥見

第 I・i 節においては、古典古代の倫理学と政治学に親和的な「悲劇」tragedia の展望が概説される。文芸理論における定義上、「悲劇」が「優れた人間の模倣」であり、「喜劇」が「劣った人間の模倣」であるかぎり、もとより古代倫理学は「悲劇」に対して好意的であり、「喜劇」に対しては一定の緊張関係にある。しかるに古代政治学を特徴づける「悲劇」の展望には、たんなる文芸理論上の定義の帰結以上の含意が指摘されねばならない。すなわちプラトンの『国家』中にみえる、最善至高の国制すらも永久不滅ではありえず、やが

ては到来する破滅を回避することはできないという洞察から窺い知れるように、古典古代の伝統において、「永遠の真実在」はあくまで認識論上の意義を帯びていたにすぎず、人間的営為の脆弱性、その諸々の限界の痛烈な意識が看取されるのである。人類の生と政治的営為に関する根源的悲観論こそが、古典的な「悲劇」の展望なのである。

## 第 ii 節 中世期における笑いの抑圧、および管理の諸形式と神聖喜劇の展望

第 I・ii 節は、古代末期以来、聖書宗教の伝統を特徴づける「神聖喜劇」*commedia divina* の展望を概説する。聖書宗教が、地上における人類の生と政治生活に関する根源的悲観論を古典古代と共有していることは疑いない。しかしながら聖書宗教は、ダンテの叙事詩 3 部作『神聖喜劇〔神曲〕』において顕示されているように、古典的な「悲劇」の展望を、これに新たな楽観的展望を接合することによって超克するのである。ここにおいて、完徳の靈魂が死、滅亡、悲嘆を不可避とする地上から解放されたのちには、神的恩寵によって救済され、天上の「永遠の歓喜」を享受するという根源的楽観論が発生することになる。ただし、この大団円は此岸ならざる彼岸において、しかも人間的営為ならざる神的恩寵の介在によってはじめて成就するために、聖書宗教が抱懷したのは、あくまで端的な「喜劇」とは画然と区別されるべき、「神聖喜劇」の展望であった。

## 第 iii 節 文芸復興期における笑いの無条件的解放と人間喜劇の展望

第 I・iii 節において概観されるのは、14 世紀に発生し、文芸復興期に隆盛した「人間喜劇」*commedia umana* の展望である。中世盛期以降、それまで教会権力による抑圧の対象でありつづけてきた「笑いの文化」が次第に解放されてゆくのが観察される。これがついに怒濤の哄笑の大波となって絶頂に達するのが、ボッカチオの短編小説集『デカメロン』においてなのである。『デカメロン』の哄笑は、ある顕著な両義性を帯びている。つまりそれは、一方において法的、慣習的な、あるいは信仰上の古き諸規範に拘泥する暗愚蒙昧を愚弄する否定の哄笑であるものの、他方において自然的欲望、とくに官能的性愛の歓喜を謳歌する肯定の哄笑である。それは、頑迷固陋な老人が旺盛な自然的欲望を抱く若者に敗退するという展開において、最も典型的に発現する。かかる両義的な哄笑は、中世都市の「祝祭」、典型的には「謝肉祭」*carnival* の時節に遍満した「民衆の笑い」が文芸諸部門へと侵入した帰結であると説明される。「謝肉祭」における「民衆の笑い」は、不断に反復される悦ばしき季節の更新、新旧の交代の心象と結びつき、あらゆる「古きもの」の死滅

が「新しきもの」の生誕の契機を孕んでいるという、集合的民衆の不滅性、したがって根源的にして、絶対的な樂觀論の表現である。『デカメロン』は「民衆の笑い」の洗練形態として、この地上にあって、しかも神的恩寵ならざる人間的配慮をもって大団円を成就せんとするところの、「人間喜劇」の展望の精神的な淵源となったのである。

#### 第Ⅳ節 1400年代末年のフィレンツェ市における宮廷文化と民衆文化

第Ⅰ・Ⅳ節は、喜劇作品『マンドラーゴラ』および『クリツィア』の観点から、政治的主著『君主論』および『ディスコルシ』に再検討を加える本稿の手続きを正当化する。1500年前後のイタリア半島においては、カスティリオーネの『宮廷人〔廷臣論〕』を輩出したところの、プラトニズムを基調とする宮廷文化と、ボッカチオを継承した笑劇文化、つまり「祝祭」の歓喜と哄笑を基調とする民衆文化が、著しく空間的に近接しつつ対峙していた。諸々の伝記研究が明らかにしてきたように、若き日々のマキアヴェッリはひとりの「中世都市の民衆」として、いまや最高潮に到達した「謝肉祭」の歓喜と哄笑に対して極めて親和的であるものの、終生、宮廷文化のプラトニズムとは疎遠でありつづけ、これを意識的に軽視、あるいは嫌悪すらしていた可能性が高い。これまでマキアヴェッリの喜劇作品についての真剣な研究を遅滞させてきた事実、すなわちこの元フィレンツェ共和国書記官は、失脚の落胆のなか『君主論』および『ディスコルシ』を執筆したのちに、報われぬ「統治の技術」に関する議論に飽いて、なにか不承不承に喜劇作品を制作したようにみえる事実にもかかわらず、たとえば『君主論』の第15章からも感知されるように、マキアヴェッリがこれら政治的主著を執筆していたまさにそのときにおいても、根源的樂觀論の歓喜に酔い痴れる、ひとりの「笑う民衆」であった可能性が高いのである。『君主論』および『ディスコルシ』の著者は、はじめから「祝祭」における哄笑との親和性を濃厚に帯びた人物なのであった。したがってマキアヴェッリは、ひとりの「人間喜劇」の制作者として政治論を編んだ最初の人間であったために、このうえなく斬新奇抜な政治哲学を構築することとなった可能性が、真剣な考究の主題とならねばならないのである。

#### 第Ⅱ章 マキアヴェッリの文芸諸作品

ニコロ・マキアヴェッリの政治的主著『君主論』および『ディスコルシ』が、「偉大な伝統」、すなわち古典古代の伝統と聖書宗教の伝統の双方と訣別し、比類なき新しさを帯びることとなったのは、それらが「人間喜劇」*commedia umana*の展望、すなわち地上にお

いて、しかも人間的営為によって大団円を成就せんとする展望に依拠しつつ倫理学、および政治学を構築したことによると思われる。しかしながら、2つの政治的主著から性急に、直接的に「人間喜劇」としての新しい政治哲学の体系を剔抉する試みは、必然的に深刻な困難に逢着する。というのもそれらの著者が明示的に古典古代の弟子を自認している事実から容易に予測されるように、両著作には「偉大な伝統」、とくに古典古代の伝統からほぼ忠実に継承された諸々の教説が、極めて複雑に錯綜しながら混在しているのである。したがって、夾雑物としての伝統の残滓が混入する割合の最も低く、最も純粹に「人間喜劇」の諸原則が表出している喜劇作品『マンドラーゴラ』および『クリツィア』を分析し、しかるのちに、これら原則の観点から2つの政治的主著に再検討を加える手続きが踏まれねばならない。このとき、2つの喜劇作品が「謝肉祭」において実際に上演されたという事実、さらに両篇ともにそのことを前提に制作されたという事実を銘記することが肝要となる。本章の目的は、2つの喜劇作品から「人間喜劇」の諸原則を析出することにある。それは、以下の2点に要約しうる。すなわち、①「静止」に対する「運動（変化）」の優位。つまり「本性（自然）」の硬直性こそが市民、家門、都市の敗亡の原因であり、運命の変転に直面しておのれの「本性（自然）」を自在に「変化」せしめることで善処するならば、悲運は回避され、大団円が成就される。②新旧の交代。つまり若者が老人に対して、すなわち「新しいもの」が「古いもの」に対して絶対的に勝利せねばならない。

## 第 i 節 喜劇制作の伝記的背景、ならびに悲劇の滑稽化としての喜劇

第Ⅱ・i 節においては、マキアヴェッリ喜劇『マンドラーゴラ』が、リウィウス史書にみえるローマ共和政創建伝説の滑稽化 **parody** であることが確認される。同喜劇は、ある若者が有夫の貞女、フィレンツェの「ルクレツィア」**Lucrezia** の誘惑に成功し、恒常的な性愛関係を取り結ぶことで大団円に至る。この喜劇が、ローマ建国史における有夫の貞女「ルクレティア」**Lucretia** の受難の物語の滑稽化であることは疑いない。「ルクレティア」は、僭主化したローマ王の子息によって強姦されたのち、親族らに復讐を、つまりは僭主の放伐を要求して自害したのであった。この悲劇的事件こそがローマの王制崩壊と共和政樹立の契機となったために、マキアヴェッリの同時代にあって、ローマの「ルクレティア」の名称は共和主義的な自由、遵法性、市民的徳性の象徴と想念されていた。したがって『マンドラーゴラ』は、誰もが古典古代の貞女を連想せずにはいない名称をフィレンツェの淑女に与え、しかもこれが貞節を完全に放棄し、官能的欲望が全面的に勝利する結末を提示

することで古典的な自由、遵法性、市民的徳性に対する懷疑を提示していた疑いがある。

## 第 ii 節 喜劇『マンドラーゴラ』の筋、あるいは策略と人間喜劇

第 II・ii 節は、喜劇『マンドラーゴラ』の筋書を概観することで、「人間喜劇」の第 1 の原則、すなわち「静止」に対する「運動（変化）」の優位の原則を抽出する。同喜劇の筋は、官能的欲情の虜となった若者が、亭主である「法学博士の老人」の暗愚蒙昧を出し抜くことで、その貞淑な婦人「ルクレツィア」の誘惑に成功するというものである。「法学博士の老人」が「静止」の、つまりは法的、慣習的諸規範に固執する愚鈍の象徴であることは明白である。この「老人」と「ルクレツィア」とのあいだには子息がなく、一門は断絶の危機に直面していた。それは、運命に対する人間的営為の限界の象徴であるだろう。もしもフィレンツェの「ルクレツィア」が、ローマの「ルクレティア」を忠実に模倣して貞節に固執するならば、劇中のすべての登場人物の悲嘆へと帰結することになる。しかしながらフィレンツェの「ルクレツィア」は、若者と同衾したのちに、おのれの「気性（自然）」をいまひとつの「気性（自然）」へと変態せしめ、賢明にも貞節を放擲し、これとの恒常的な不義密通の関係を取り結ぶのである。その結果、何も知らぬ愚かな「法学博士の老人」は、真実には不義の子であるものの、世間体の上では嗣子となる嬰兒を獲得し、劇中のすべての登場人物が歓喜に沸いて大団円は成就する。しかもこの大団円は、いかなる「機械仕掛けの神」*deus ex machina* にも依拠することなく、もっぱら登場人物らの策略によって成就するのである。ここに見て取れるのは、固定的規範への、「古い〔古代の〕美德」*antica virtù* への執着こそが古典的な、したがって悲劇的な結末の原因であり、運命の変転に即しておのれの「本性（自然）」を柔軟に「変化」せしめ時流に適応するならば、地上における、もっぱら人間的配慮による歓喜が約束されるという洞察なのである。

## 第 iii 節 寓話『大悪魔ベルファゴール』、および喜劇『クリツィア』による補完

第 II・iii 節が考究するのは、喜劇作品『クリツィア』による『マンドラーゴラ』の補完の意味である。『クリツィア』中、フィレンツェの「ルクレツィア」がめでたく懐妊に至ったことが語られており、2 つの喜劇作品は制作者によって意識的に筋の連続性を与えられた姉妹編の体裁をなす。『クリツィア』の筋は「ニッコーマコ」なる助平な「老人」が、美貌の少女をめぐっておのれの息子と争い、敗北してゆくというものである。劇中、官能的欲望に駆られた「老人」は、猛然と諸々の「変化」を試みて運命を制し、ほとんど若者を圧

倒しているようにみえるため、ときに『マンドラーゴラ』と『クリツィア』のあいだに喜劇作者の思想の転換が指摘される。だが、『クリツィア』における「老人」の敗北は、むしろ「人間喜劇」の第 2 の原則による『マンドラーゴラ』の補完と理解されるべきである。すなわち運命と時流の変転に対しては、おのれ「本性（自然）」を頻々と「変化」せしめることで対処すべきであるものの、ただし勝利を収めるのは「古きもの」、つまり老人ではなく、絶対的に「新しきもの」、つまり若者であらねばならないのである。色狂いの「老人」、「ニッコーマコ」の名称が喜劇作者の姓名、ニッコロ・マキアヴェッリに由来していることは確実視される。晩年のマキアヴェッリは、挫折に終わった自身の最後の恋情、あるいは無念の生涯全体を自嘲することで、「人間喜劇」の第 2 の原則を確認していたのである。

### 第Ⅲ章 人間喜劇と新しい政治哲学

本章は、2 篇のマキアヴェッリ喜劇から析出された「人間喜劇」*commedia umana* の 2 つの原則のうち、第 1 の原則、すなわち「静止」に対する「運動（変化）」の優位の原則が、2 つの政治的主著においても貫徹されていることを確認する。これをもって、『君主論』における「力量」*virtù* の観念、ならびに『ディスコルシ』における共和政体論の前例なき新奇さが、先行諸研究に比してより精確に把握されるのである。

#### 第 i 節 マキアヴェッリ倫理学の再検討、あるいは賢慮としての力量

第Ⅲ・i 章においては、主として『君主論』にみられる「力量」の術語の多義的用法を分析し、これが何故「偉大な伝統」と、わけても古典古代の伝統と訣別することとなったのかを考究する。しばしば指摘されるように、『君主論』中、ときに「力量」が戦士の男性的徳目、つまりは物理的闘争における卓越性として想念されていることは確かである。しかしながら、かかる狭義の「力量」がこの観念のすべてであったならば、倫理学上の刷新が発生することはなかったであろう。というのも戦士の男性的徳目の称揚は、疑いなく古典古代、あるいは文芸復興期に広くみられた議論なのである。むしろ注目すべきであるのは、狭義の「力量」が「賢慮」*prudenza* と結びつき、広義の「力量」を構成していることである。ここにおいて「賢慮」とは、時流の変転に適応しておのれの「資質」、「前進の様態」、すなわち「本性（自然）」を自在に変容せしめる能力である。「本性（自然）」の硬直性こそが、あらゆる君侯、市民や都市の敗亡の、つまり悲劇的結末の根本原因なのである。広義の「力量」を構成する 2 つの能力のうち、倫理学上の刷新は、むしろ「賢慮」において発

生している。『君主論』中、「賢慮」の重要性が肥大するに比例して、狭義の「力量」は遠景へと後退してゆく傾向がみられる。ついに第 25 章冒頭部分に至り、「賢慮」の観念は「運命」と「神」に対峙する人間の「自由な意欲」libero arbitrio、広義の「力量」の観念そのものと、ほとんど外延を一致させるのであった。『君主論』は、まさしく「人間喜劇」の第 1 の原則を貫徹することによって、「力量」の観念に刷新をもたらしたことになる。

## 第 ii 節 短編小説『ジェータとビッリア』と『君主論』の教説

第Ⅲ・ii 章は、『君主論』の成立が告白される 1513 年 12 月 10 日付フランチェスコ・ヴェットーリ宛書簡上、マキアヴェッリが同時代に流行した短編小説、『ジェータとビッリア』中の登場人物のひとりに自身をそれとなく類比していることの意味について考察し、もって第 i 節に得られた結論を補強する。同書簡において、『君主論』執筆期のマキアヴェッリは、おのれを「ジェータ」、すなわちあらゆる存在の「本質」、「形相」、そして「名称」を「変化」せしめ、おのれもまたあらゆる存在へと「変身」するユピテル神の技能を獲得したと申し立てる似非「哲学者」に擬えている。「人間」の「本性（自然）」を「ろば」の「本性（自然）」へと「変身」せしめることすらできる「知識」と「より新しい方法」の所有者に自身を類比する諧謔によって、マキアヴェッリは『君主論』の教説の革新性に関する自己理解を漏洩しているように思われる。すなわち『君主論』の革新性が、「自然」の多様性と流動性を明察して、おのれの「本性（自然）」において「変身」を遂げる「賢慮」、あるいは「力量」の勧説、したがって「人間喜劇」の第 1 の原則の教示に存していることを、著者自身もまた認識していたように思われるのである。

## 第 iii 節 『ディスコルシ』の第 I 巻における伝統批判、すなわち悲劇の回避

第Ⅲ・iii 章において確認されるのは、「静止」に対する「運動（変化）」の優位という「人間喜劇」の原則が、『君主論』における「力量」の観念と同様、『ディスコルシ』における共和政体論にあっても貫徹されていることである。古典的政治学の伝統には、ただ「古い城壁」の内部において、つまりは「閉ざされた都市」のおいてのみ、有徳の政治生活は可能であるという認識がみられる。習俗を異にする外来民との接触は、都市民らの頹廢と拝金の氣風をうみ、やがては内紛を惹起する。ただし古典的政治学は、「閉ざされた都市」が運命の変転に対して極めて脆弱であり、断じて不滅性は期待しえないことを承認した。したがって有徳の政治生活の古典的な理想は、「悲劇」の展望、人類の政治的営為に関する根



源的悲観論を包蔵していたことになる。『ディスコルシ』もまた、外部に対して「閉ざされた都市」においてのみ、有徳の政治生活は可能であることを認めている。しかしながら、「閉ざされた都市」とは端的に「悲劇の都市」である。新しい共和政体論は、おそらく「善く生きること」にもまして「ただ生存すること」に強烈な関心を抱いているために、古典的政治学の理想、儚くも美しい理想を排撃せねばならない。かくして「喜劇の都市」は、「死と滅亡」を回避すべく、不動の政治秩序の理想を放棄して、「運動（変化）」を繰り返す「拡大的共和国」とならねばならないのである。

#### 第Ⅳ節 『ディスコルシ』の第Ⅱ巻における伝統批判、すなわち限界の超越

第Ⅲ・Ⅳ節は前節を継承して、共和政体は不断に「諸々の限界」 *termini* を侵犯することによって「死と滅亡」の「悲劇」を回避しようという洞察が、「人間喜劇」の第 1 の原則の反映であることを確認する。すなわち「喜劇の都市」は、参政資格における「限界」を超越して寡頭的国制を放棄する。そして広範な平民武装と異邦人への市民権の授与をつうじて、支配領域を拡大し、「古い城壁」の「限界」を超越する。さらには必然的に生じる空間的拡大と社会構造の変質に対しては、古来の法制度によって画された「限界」の超越、つまりは建国当初の法秩序の随意的改定をもって対処するのである。これら古典的政治学の諸教説の転倒、斬新奇抜な共和政体論は、すべて「悲劇」の展望と親和的な静態的秩序の理想を排斥して、頻々たる「運動（変化）」により「命数の限界」を超越し、「不滅の都市」を実現せんとする「人間喜劇」の展望の反映なのである。

#### 第Ⅳ章 人間喜劇と革命の原義

『ディスコルシ』は、「諸々の限界」 *termini* を不断に侵犯しつづけたローマ共和政の実践、すなわち参政資格の「限界」を撤廃し、「古い城壁」を乗り越えて支配領域を拡張し、異邦人らの大挙流入に伴う社会構造の変質には古来の法制度の改変をもって対処した実践を、「人間喜劇」の第 1 の原則、つまりは「静止」に対する「運動（変化）」の優位の原則に一致するとして支持したのであった。それは、「古い美德」 *antica virtù* を堅持する不動の「閉ざされた都市」の古典的理念が、やがて逢着せねばならない「死と滅亡」 *morte e rovina* の悲劇的結末を回避せんとする意図に導かれていたのであった。しかしながら、ローマ史研究をつうじて「不滅の都市」の可能性を探求する試みが、明白にして厳然たる「アポリア」 *aporia* に直面することは必定である。すなわち、ローマ共和政崩壊、あるいは地

中海帝国の全的滅亡の歴史的事実である。本章において、あまりにも困難なこの「アポリア」を、『ディスコルシ』はいかにして克服せんと企図したのかが究明される。

#### 第 i 節 国制の循環論とローマ史の悲劇性、そして人間喜劇のアポリア

第IV・i 節は、『ディスコルシ』中、「不滅の都市」の建設による地上の大団円を実現せんとする根源的楽観論が、確かに動揺をきたしている諸論説が散見されることを指摘する。「単純物体」がその「資質」、「前進の様態」、あるいは「本性（自然）」において、したがって「形式」*forma* においてどれほど「変化（運動）」を繰り返そうとも、その「身体」における、したがって「素材」*materia* における老朽化の過程、最終的には死に至る不可逆的な過程に抗うことは絶対的に不可能である。『ディスコルシ』には、これと同様に「混合物体」としての都市においてもまた、参政資格や支配領域、法律や国制、換言するならば「形式」における「変化（運動）」とはほとんど無関係に、「素材」としての市民団の習俗や徳性が不可逆的に劣化、老朽化して、腐敗墮落してゆくという認識がみられる。ローマ共和政の倒壊とは、いわば市民団の不可避的な腐敗墮落ののちに到来した死であった。

#### 第 ii 節 大洪水の浄化作用の模倣、そして人間喜劇のアポリアの克服

第IV・ii 節は、『ディスコルシ』の追求する「不滅の都市」の計画が直面した「アポリア」は、「人間喜劇」の第 2 の原則、すなわち新旧の交代の原則によって克服されていることを確認する。ひとつの全体として把握された『マンドラーゴラ』と『クリツィア』における「人間喜劇」の展望は、ただ「ルクレツィア」が「変身」を遂げて、貞操を放棄したのみでは成就しえなかったことが銘記されるべきである。というのも、「ルクレツィア」がいかに不貞の歓喜を享受しようとも、その「素材（身体）」における不可逆的な老化の過程と、やがて訪れる死を回避することはできない。「人間喜劇」の展望は、不義密通の帰結としての新生児の誕生、つまりは「素材（身体）」の新生、したがって「始源」*principio* の回復が、『クリツィア』中に告知されることによってはじめて完成したのであった。永久に反復される新旧の交代、「古きもの」の死滅と「新しきもの」の誕生の心象こそが、根源的楽観論を救済するのである。これと同様、濃厚に「謝肉祭」*carnival* の歓喜や哄笑との親和性を帯びた「始源への回帰」の心象は、明白に『ディスコルシ』においても貫徹されている。かの「アポリア」の克服の契機となっているのは、人類の種的記憶として普遍的に語られる「大洪水」の伝承である。悠久の歴史上、たびたび「黒死病」、「飢饉」、そして「大

洪水」等々の大災厄は人類文明を壊滅させてきたのであったが、その都度に爛熟し、老いて腐敗墮落した人類は、「始源」における習俗と徳性の純朴へと「回帰」してきたとされる。無論、「大洪水」は「天界」あるいは「自然」の作用であるものの、人間的営為は「自然」を模倣する。したがって都市の「素材」としての市民団の習俗と徳性における腐敗墮落が、「大洪水」に比定される異常な人間的作為の衝撃によって、つまりは「始源への回帰」の巨大運動によって矯正されるのならば、「不滅の都市」は可能であるというのである。

### 第Ⅲ節 『ディスコルシ』の第Ⅲ巻の主題、すなわち始源への回帰と革命の原義

第Ⅳ・Ⅲ節は、「人間喜劇」の展望を完成させる「始源への回帰」の巨大運動、すなわち「革新」*rinnovazione*こそが、『ディスコルシ』の第Ⅲ巻の主題であることを確認する。人間の「自由な意欲」*libero arbitrio*をもってする「革新」の運動は、諸々の卓越せる市民たちの最も異常な行為によって発動するという。これら行為は、「始源」に遍在した「恐怖とテロル」を想起せしめることによって、あるいは鮮烈な「模範」として機能することによって、「素材」としての市民団に「新たな生命と新たな美德」*nuova vita e nuova virtù*を鼓吹するというのである。10年の間隔をおかずして不断に諸々の「革新」が生起するならば、反復的に「素材」の清新は回復され、かくして「不滅の都市」は可能であると断言されている。『ディスコルシ』の第Ⅲ巻の明示的主题として提示されるところの、ローマ共和国市民らの傑出せる「諸々の行為」とは、厳密に解されるならば、ほかならぬ「革新」の運動なのである。ここでは、「人間喜劇」の根源的樂觀論を約束する「始源への回帰」の教説は、特定の市民の個人的な「力量」の所為として語られている。かかる大規模領域国家成立以前の政治的思惟に特徴的な非人格的構造に対する意識の欠落によって大幅に混濁されているものの、『ディスコルシ』の第Ⅲ巻の主題としての「革新」は、「革命」*revolution*の政治現象の極めて原始的な意味内容を帯びている疑いがある。近現代政治史における最も壮大にして、意義深い現象としての「革命」の概念の歴史的変容を瞥見し、これと「革新」の観念との看過すべからざる類似性を指摘して本稿は結ばれる。かくしてマキアヴェッリ政治哲学が「偉大な伝統」、つまりは古典古代と聖書宗教の双方の伝統と訣別する契機となった展望、すなわち地上において、しかも人間的配慮をもって大団円を成就せんとする「人間喜劇」の展望の全容は説き明かされるのである。

以上。